

して、グロジンスカ先生が座って私のために簡単なメロディーを弾いてくれたとき、彼女の指の下からそのような美しいものが生じるのを聴いて私は驚いた。演奏するにつれて、先生は地味な女性から、彼女の生み出す音と同じくらい調和のとれた動きの人物に変わっていった。私はすぐに、自分がそんなふうに音を生み出せるようになりたいと思っているのがわかった。

副詞句・節(8)

素材が異なると熱伝導率も異なる。柄がついた鉄のフライパンはすぐに熱くなりすぎて触ることができなくなる。これは鉄がとても速く熱を伝えるからだ。木の方が熱を伝えにくいので、フライパンは木製の柄のついたものの方がよい。同様に、空気は水ほどに熱を伝えない。

副詞句・節(9)

松本先生は、英語の授業はジョークで始めるべきだと考えている英語教師である。彼はつねに面白いジョークを創作しようと試みている。彼の生徒たちの中には、彼のジョークが時間の無駄であると不満を述べた者もいる。彼の同僚もまたジョークを書くのにそんなにたくさんの時間を使わない方がいいと助言してきた。しかし、松本先生はかなり頑固な人物なので、こうした人たちのいうことに聞く耳を持つとせずつ、授業のためにジョークを考えるのに多くの時間を使い続けている。

副詞句・節(10)

ホール先生は、良心的な医者だ。朝早くから夜遅くまでとても熱心に仕事をする。患者が待っていると昼食を抜くこともしばしばある。自分自身の体にはほとんど注意を払わないが、自分の患者のことは、完全に回復した後でも本当に心配している。

副詞句・節(11)

キャンプの1日目のことだった。皆が到着してから、1時間ほどが経過したとき、木の下にひとりで座っている小柄な男の子に気づいた。その子は、やせ細っていて、顔が青白く、明らかに不安な様子だった。正直言えば、その子に接近するのは気が進まなかったが、先輩のスタッフは、仲間に入れないでいる参加者、ちょうどこの子のような参加者には目を配るようにと、私たちを指導していた。たとえ楽ではないと感じても、彼と話をするのは自分の責任だとわかっていたのだ。

副詞句・節(12)

ブラウン一家は札幌から富良野までレンタカーでドライブした。ドライブ中、4人の子どもたちは興奮しているので、しゃべったり、奇声をあげたりし続けていた。子どもたちの笑い声やくすくす笑い、絶え間ない叫び声にブラウン氏は悩まされた。何度か彼は子どもたちに静かにしろと言った。ところが、子どもたちは父親の言うことを聞かなかった。ブラウン氏はだんだんとても腹が立ってきて、ついに子どもたちに「これが最後の警告だ」と言った。

副詞句・節(13)

私は困ったときに頼ることのできる友達がいることが重要だと思います。私たちは誰しも、つらいときがあり、そんなときに話せる人が必要です。どれだけたくさんの友達がいても、信頼できる人がいないかぎり、問題は解決されません。友達がたくさんいるからといって、常にその人たちの助言が問題を解決する手助けになるとは限らないのです。

形容詞句・節(1)

その報告書は、環境革命を実現するための最初のステップとして、浪費の習慣を変えなければならな

いと述べている。環境庁によって行われた調査によれば、(調査に) 答えた人のうち 31 %の人だけが、ものを買うときに環境への影響を重視すると述べた。この割合が増えなければならない。

形容詞句・節(2)

現代の女性は一日本でもアメリカでも一経済的にも心理的にも、かつてのように男性に依存していない。彼女たちはもう独身でいることを恐れてはいない。なぜなら、彼女たちは 40 年前には知らなかった新しい自由を享受しているからだ。

形容詞句・節(3)

ナオミはどこにでも電話を持っていく。家にいる時は、すぐに出来るように、電話はトイレでさえ彼女と共にいるのだ。

彼女が友人だという人たちの電話番号、およそ 300 が通常は電話のメモリーの中にみつかる。「初めての人と会うときには、その人の電話番号を入れるんです」と彼女は語った。「電話の中に多くの番号がためられていると、それだけ多くの人が私のことを気にしてくれていると思えてうれしくなるんです。

形容詞句・節(4)

新聞を毎日読むアメリカ人の数は減っている。今日では、20～30 年前なら新聞を読んでいたであろう人々は、ニュースを、インターネットや携帯電話や 24 時間放送のケーブルテレビといった他のメディアに頼るのだが、(他のメディアなら) 彼らはニュースをいつでも得ることができるのだ。その上、彼らをそれ(＝ニュース)を読む必要すらない。自分が欲しいニュースをダウンロードすることができ、イヤホンを差し込み、目を休めることができるのだ。

形容詞句・節(5)

日本語を話す人は、英語を話す人と話すために英語を使う時に、どんな問題に直面するのだろうか？恐らくこれらの問題の中でもっとも大きなものは、話されていることを区別するために英語はどのようにに強勢(つまりアクセント) — ある言葉の一つの母音を他の母音よりも目立つように、はっきりと発音すること — を使うかということにある。例えば、リヴェル は動詞だし、レベル は名詞である。

形容詞句・節(6)

新しい技術は世界を以前にはなかったようなやり方で結びつけている。地球は小さくなっている。それは今や「地球村」であり、そこでは国々はファックスや電話や衛星による結びつきによって「結びつきのおかげで」数秒しか離れていないのだ。テレビ会議や携帯電話、そしてハイテクの進歩は海外市場を町の反対側にある支店と同じくらいの近いものにしてしている。そして、当然だが、こうしたハイテクのコミュニケーション装置から利益を得る能力は外国語能力によって大きく高められるのだ。

形容詞句・節(7)

テッドとキャシーは地元の選挙について話をしていた。彼らはどの候補者に投票するかまだ決めていなかった。テッドはキャシーにと言った。「僕は失業率を減らそうとしてくれる候補者に投票したい」

キャシーはうなずいて言った。「多くの人々がここに原子力発電所を建設する問題についての是非を議論をしているけど、まだ何もなされていないから、私はこれを解決しようという候補者に投票するつもりだわ」テッドは言った。「ほんとそうだね。あれはもう何年もこの町では誰も扱いたがらない問題だからね」